ブータンの世紀の実験
「GNH（国民総幸福）による国づくり」の実態と今後
ラダックと比較して

大橋　照枝

目　次

はじめに
一　ブータンのGNHは国を挙げての世紀の実践
二　GNHの誕生
三　GNHの四つの戦略的目標と九つの指標
四　同じチベット仏教カーギュ派の文化をもつヒマラヤの国ラダックとの比較
五　ラダック「懐かしい未来」
六　GNHに関する国民意識調査
七　第二回GNH調査に見るブータンの近未来
八　第二回GNH調査に見るブータン社会の問題点
九　ラダックとブータン、一致点と相異点
一〇　ラダックを襲う金銭経済
一一　ラダックの実態から学ぶ〝幸福〟のあり方
三　ラダックとブータンの共通性

はじめに

☆　GDP批判と代替指標の開発

経済の大きさだけの指標GDP（国内総生産）に対しては、一九三二年に米国商務省から国の経済力を年度ごとに比較したり、他国の経済力と比較したりすることを可能にするシステムの開発を委託されGNP（国民総生産）を開発した経済学者サイモン・

クズネッツ（一九〇一～一九八五）は、この尺度があたかも豊かさの尺度であるかのように使われ、一人歩きをしていくのを見て、一九三四年に「GNPといったかたちで測定された所得からは、国の豊かさはほとんど推し測ることはできない」とアメリカ議会にあてた最初の報告書で述べていた[1]。

GDPは、人間の幸せにとってマイナスの戦争、交通事故、自殺、離婚、環境破壊などが生じても金銭的支払いが生じると加算し増大する。一方人間の福祉にとって不可欠な家庭内の家事・育児・介護（主として女性が担っている）には金銭的支払いが伴わない（市場を経由しない）ということで、GDPには一切加算されない。

GDPのこの欠点をカバーする指標を求めて、一九七二年にMEW（Measure of Economic Welfare 経済福祉尺度）をノードハウスとトービンが提案し[2]、また翌年NNW（Net National Welfare 国民純福祉[3]）を日本の経済審議会NNW開発委員会が開発したが、いずれもGDPを凌駕する決定打とはなりえなかった。

その後、SEEA（System of Environmental and Economic accounting 環境経済統合勘定）が開発され各国でそれなりに活用されている（日本では、内閣府経済社会総合研究所で算出され活用されている）。

ハーマン・ディリーらが八〇年代に開発したISEW（Index of Sustainable Economic Welfare 持続可能な経済福祉尺度）や九〇年代にその進化形として登場したGPI（Genuine Progress Indicator 真の進歩指標）は、一〇数カ国で算出されるに止まっている。

UNDP（国連開発計画）が一九九〇年から毎年世界各国のHDI値（Human Development Index 人間開発指数）を「人間開発報告書」で、発表して本年で一二年目となる。

☆　GDPは幸福を測るのには向いていないが経済パフォーマンスの指標として有用（スティグリッツ委員会）

GDPを凌駕する指標はまだ開発されていないが、一つエポックメイキングな動きとして二〇〇七年にEUで“Beyond GDP”（GDPを超えて）の動きがあり、二〇〇七年一一月一九日～二〇日、ベルギーのブリュッセルで欧州委員会、欧州議会、OECD（経済協力開発機構）、WWF、ローマクラブの主催で「Beyond GDP Conference」が開催され、GDPの問題について、従来からの批判を継承し、国連、OECD、世界銀行を含む他の機関とともに、他のステークホルダーとGDPを越えた尺度

の必要性を訴える政治的合意ができている」と総括されている。[4]

この流れから、二〇〇八年四月に、フランスのサルコジ大統領は、ノーベル賞受賞経済学者のジョセフ・スティグリッツやアマルティア・センらに委嘱して、GDPを越える尺度を出してほしいとした。事務局には、OECD、フランス国立統計局、OFCE（フランス景気観測所）が連携。CMEPSP（Comission on the Measurement of Economic Performance and Social Progress 経済成果と社会進歩の計測委員会）と称される同委員会は、通称スティグリッツ委員会とも呼ばれている。

二〇〇九年九月、スティグリッツ委員会は、報告書を出した。その中で同委員会は、「GDPは経済パフォーマンスの代表的指標で、幸福を測る指標としては適切ではないかもしれないが、経済活動の評価指標として有用」との視点を出している。[5]

一方、スティグリッツ委員会のメンバーに、統計局長が参画し、また事務局ともなっているOECDは、二〇一一年に「よりよい暮し指標」(OECD well-being indicators) を発表した。

昨年がOECDの設立五〇周年でもあり、エポックメイキングな出版物としての意味もある。OECDの幸福指数は、一一の分野（①所得と富、②職業と収入、③住宅事情、④健康状態、⑤ワーク・ライフ・バランス、⑥教育と技術、⑦社会的関係、⑧市民参加とガバナンス、⑨環境の質、⑩個人の安全、⑪主観的幸福感）に、約二一のデータを導入して、OECD三四カ国を中心に比較している。

このOECDの幸福指数は、今のところ、データの使い方にバランスがとれており、指標としての意義は大きい。

しかし、筆者が提案している、〝将来世代にツケを回していないか〟（例えば、一五歳～二四歳の若者の失業率、子供の貧困率へ一八歳未満）についてはその項目はなく、その視点もないのが、悔やまれる。

二〇一一年には、さまざまな幸福指数が提起された。

日本では法政大学大学院の坂本光司教授らの研究グループが算出した四〇指標でみる全国自治体の幸福度。[6] 環境、経済、暮らしの三つがバランスよく発展しているかをみる日本経済新聞の九〇の関係する指数に基づく「サステナブル（持続可能な）都市ランキング」[7]（二〇一一年一〇月）、またドイツではドイチェ・ポストが「ドイツ幸福地図」を示した。ドイツの地図の上で、どの地域が幸福度が高いかを示し、ハンブルグが、ドイツの中で最も幸福度が高いと出ている。[8]

一　ブータンのＧＮＨは国を挙げての世紀の実践

このように、世界中が、幸福の尺度やあり方を求めている中で、ブータン（人口七〇万人、面積九州の〇・九倍（四六・五〇〇㎢））は、ＧＮＨ（国民総幸福）を国是とし、その実践を国の政治や行政の政策の中にきちんと折り込んで、実行しているという点で、幸福実現大国として、世紀の実験をしていると位置づけられる。この点幸福指標ＧＮＨはブータンが国策として実践している点で他の指標と大きく異なっている。

二　ＧＮＨの誕生

ＧＮＨは、ジグメ・シンゲ・ワンチュク第四代国王（在位一九七二～二〇〇六年）が、二一歳で一九七六年一二月のスリランカのコロンボでの第五回非同盟諸国会議に出席後の記者会見で、“Gross National Happiness is more important than Gross National Product”と発言して、ＧＮＨが国際的に発信された。[9]

第四代国王は一九七二年、英国留学からの帰国後一六歳で、第三代国王の死により、国王として即位している。ＧＮＨの発想は、即位当時、国の各地を回りながら、ブータンはＧＮＰでは小さいかもしれないが、ＧＮＨではどこにも負けない国にできると発想したと聞いている。二〇〇八年、第四回ＧＮＨ国際会議が、ブータンの首都ティンプーで開催され、九〇人の出席者全員が一人一人第五代国王と言葉を交わしたあと、昼食をごちそうになっていた時「私も、父がしたように、ブータンの国をすみずみまで回りたい」と話をされていた。

従って、ＧＮＨの発想は、第四代国王が一六歳で即位したあと、数年間に発想したと思われるが、英語での発信は公式に国際的に知られる鍵となるので一九七六年をＧＮＨ発表の年としたい。

本年でＧＮＨの歴史は三六年目となる。

三　ＧＮＨの四つの戦略的目標と九つの指標

ブータンのＧＮＨが、他の幸福指数と異なる点は前述のように、国をあげての実践の手段としていることであり、その内容は、ブータンが今まで三回行っているＧＮＨの国民意識調査に、具現化されているので、その調査結果をふまえながら、解説してみたい。

ＧＮＨは、一九九〇年代までは、四つの戦略的目標が中心であ

った。[10] つまり「経済的自立」「環境保護」「文化の推進」「良き統治」の四本柱であり、この四本柱は、今日も、GNHの基本となっている。しかし、二〇〇六年に、ブータン総研（ブータン国営のシンクタンク）が、GNHの九つの指標を提唱して、GNHの中味がより具体的になった。

つまり

①時間の使い方とバランス
②良き統治
③人々の健康
④文化の多様性
⑤地域の活力
⑥生活水準・所得
⑦精神面の幸福
⑧環境の多様性と活力
⑨教育

の九つの指標である。

これまでにGNHに関する意識調査は、三回行われているが、それ以外に二〇〇五年に、世論調査で「あなたは幸福ですか」との一問だけ調査が行なわれ〝九七％が幸福と答えた〟という有名な結果が出ている。[11] ブータンの貧困率は、二三・二％とされているが、チベット仏教カーギュ派の教えが子供から高齢者まで浸透し、とくに「互助・互恵」（ボランティアと寄付）は、『寄付白書二〇一〇』（日本ファンドレイジング協会編、日本経団連出版、二〇一一）でみる日本の数値をはるかに上回る。そのため例え貧しくとも、誰かが助けてくれるという安心感があるためだ。ボランティアや寄付は、個人間のやりとりであるため、市場を経由しない。そのためGDPにはカウントされない。したがってGDPは小さくとも、互助・互恵があるため幸福感が高いといえるのだ。

四　同じチベット仏教カーギュ派の文化をもつヒマラヤの国ラダックとの比較

ブータンは、ヒマラヤ山脈東側の内陸国で、ジグメ・シンゲ・ワンチュク第四代国王（在位一九七二～二〇〇六年）が即位される頃までは鎖国同然で、桃源郷のような風景が存在しており、日本人始め、多くの旅行者に郷愁を感じさせる。筆者の認識では、ブータンは森林率が国土の七二％あり（それを六〇％以下にしてはならないと憲法で定められている）、日本も森林率は六六％あり、新幹線の車窓から見える日本の里山風景が、ブータンに来て

よみがえり、ノスタルジアを感じさせるのだ。

第四代国王は、退位後、二〇〇八年から、王政を廃止して、立憲議会制民主主義国とすべく、総選挙や憲法公布への道筋をつけて退位された。憲法は、第四代国王在位中に、世界一〇〇カ国の憲法を集めて参考にする「憲法起草委員会」を組織し、日本国憲法にもない〝民主主義〟〝環境権〟をきっちりと折り込み、国王の定年を六五歳として議会の三分の二以上が賛成すれば国王を罷免できるとし、第九章に「GNHを国是とする」とうたった。

こういう筋道をつけて二〇〇八年三月の総選挙で、七八・八%の高投票率で議会がスタート。二〇〇八年七月一八日憲法が発行された。

ブータンは、前国王の指令で一九八九年一月六日「固有の文化を守ることを国是とし、王宮、役所、学校、職場、寺院、公式の場では、男性はゴ、女性はキラという民族衣裳を着用するなど」が指示されている。

ブータン人の「ブータンの毎日の生活の伝統を守ること」を〝非常に重要〟（八六・三%）、〝重要〟（一二・六%）とする率が計九八・九%にも及んでいる（詳細は後述）。

また、ブータン社会のセーフティネットともいわれる〝互いに絆を大切にする〟という、「ディグラム・ナムザ」を重要とする率は九三・七%に達しており、ブータン人の〝人生の目標で大切なもの〟は「家族生活」（九五・一%）となっていて（いずれも後で紹介する、ブータンのGNHの意識調査第二回より）、ブータンは、王がイメージシンボルとして存在し、一般国民はブータンの文化や絆や、ブータン人が最も大切にしている「家族生活」を重視しており、近年、ティンプーの消費社会が拡大し、ブータンらしさが失われていくのではないかとの懸念が報道されているのは、そんなに当らないといえる。

五　ラダック「懐かしい未来」

同じく、ヒマラヤの元王国ラダックという国が、ブータンと同じチベット仏教カーギュ派を信奉している。この国は、元はブータンのように王国で一八四六年にジャンムー・カシミール藩主の統治下にあったが一九四七年、インド・パキスタン戦争後、インド連邦となり、現在は、インドのジャンムー・カシミール州東部の地方の一部となっている。

このラダックが、インドから押し寄せる文明や開発の波に洗われ伝統文化が崩壊し、人々の平和で幸せな世界が失われていったことを、スウェーデン出身の言語学者で一九七五年から二年間ラ

ダックに住んで直面した、ヘレナ・ノーバーグ・ホッジ氏が『ラダック 懐かしい未来』（山と渓谷社二〇〇三年刊、「懐かしい未来」翻訳委員会・訳）の中でさまざまに訴えている。又、ヘレナはこのテーマで、映画「幸せの経済学」を制作し、日本でもいくつかのグループが自主上映している。

本論は、ブータンのＧＮＨ政策実現行政の実態と、二一世紀の幸福国家樹立という壮大な実験の成り行きを確認するとともに、国という形態を失ったラダックと比較して、何かブータンの将来にも懸念することはないのかについても述べてみたい。

六　ＧＮＨに関する国民意識調査

国民のＧＮＨに関する意識調査は、次の三回行われている。

第一回調査、二〇〇六年九月～二〇〇七年一月、一五歳以上三五〇サンプルで五七の質問項目。ブータン二〇県中、九県で行なわれた（Paro, Punakha, Thimphu, Trongsa, Bumthang, Mongar, Lhuntse, Chukha, Sarpang）。

この調査は、オックスフォード大学のＯＰＨＩ（Oxford Poverty & Human Development Initiative）の所長、サビーナ・アルカイア博士がブータン総研所長のダショー・カルマ・ウラ氏をサポートして、調査方法を開発し一本の論文にまとめている（Sabina Alkire, Maria Emma Santos, and Karma Ura; Gross National Happiness and Poverty in Bhutan: Applying the GNH Index Methodology to explore Poverty）。

但し、サービーナ・アルカイア博士は、貧困研究の第一人者であり、ＯＰＨＩは貧困研究のメッカであるため、ブータンを貧困な国だとの位置づけが強調されている。

ブータン総研の大部分の研究者たちは、この研究にタッチしていないこともあって、この第一回の調査は、ブータン総研のスタッフ達は国民意識調査にカウントしていない。

その理由を、二〇一一年一二月五日、六日の二日間、東京の政策研究大学院大学で行なわれた、内閣府経済社会総合研究所とＯＥＣＤなどとの共催の「幸福度に関するアジア太平洋コンファレンス」で基調講演をされた、ブータンのＧＮＨ委員会担当長官のカルマ・ツェテーム氏に聞いてみると、ブータン総研が十分コミットした調査ではなかった――という話であった。

七　第二回ＧＮＨ調査に見るブータンの近未来

ブータンのＧＮＨ調査の第二回調査（これをブータン総研では

第一回と位置づけている）は、二〇〇七年一二月から二〇〇八年三月、一五歳以上九五〇サンプルで、七二の質問項目で行われ、ブータン二〇県中、一二県（Dagana, Tsirang, WangduePhodrang, Samtse, Zhemgang, SamdrupJonghar, Tashigang, PemaGatshel, Tashi Yangtse, Gasa, Haa, Thimphu）で実施された。

第三回のＧＮＨ調査（これをブータン総研では第二回としている）は、二〇一〇年一二月に終了予定で、二〇一〇年に行われ、八〇〇〇サンプルで二四九の質問項目で、ブータン全二〇県で行われ、二〇一一年四月二日付で、ブータン総研からPreliminary findings of the 2nd GNH survey 2010 としてSamdrup-Jongkhar県の調査速報値が全八三頁のすべて図のみで出されている。

また二〇一一年一二月に、ブータン総研からGNH Survey Findings 2010 として、ＧＮＨの九つの分野についての集計の図が出ているが、第二回のような詳細な分析の論文はまだ見当たらない。

ここでは、ブータン総研が認めていない、第一回調査の報告と、ブータン総研が第一回としている第二回調査について、内容を紹介したい。

それを見ると、ブータンの行政は、何を幸せと考え、ブータン国民はどう受けとめているかが明らかとなる。

第一回調査は、オックスフォード大学ＯＰＨＩのサビーナ・アルカイア博士の指導によって九つの指標にそれぞれ次の設問がわり当てられた。

i	時間の使い方とバランス	二問
ii	良き統治	七問
iii	人々の健康	六問
iv	文化の多様性	一三問
v	地域の活力	一〇問
vi	生活水準・所得	八問
vii	精神面の幸福	六問
viii	環境の多様性と活力	二問
ix	教育	三問
		計五七問

ＧＮＨは、定量的にスカッと割り切れる指標というより、定性的な内容が多い。そこで調査データの集計には、アルカイア博士の指導により次のような考え方をとり入れている。

例えば「文化」の指標の中の「伝統的スポーツの実施頻度」を評価する場合、ある指標について、それ以上あれば充足してい

図①　例えば「文化」の指標の中の「“伝統的スポーツ”の実施頻度」の評価

る、あるいは幸せであるという値（閾値）を「充足カットオフ」(Sufficiency cut off) と名付ける。また、それ未満であれば、貧困という値を、「貧困カットオフ」(Poverty cut off) と名付ける。充足カットオフ対貧困カットオフ。こうして、五七の質問について、被調査者の回答を充足カットオフ、貧困カットオフ、の数値に置きかえていく（図①）。

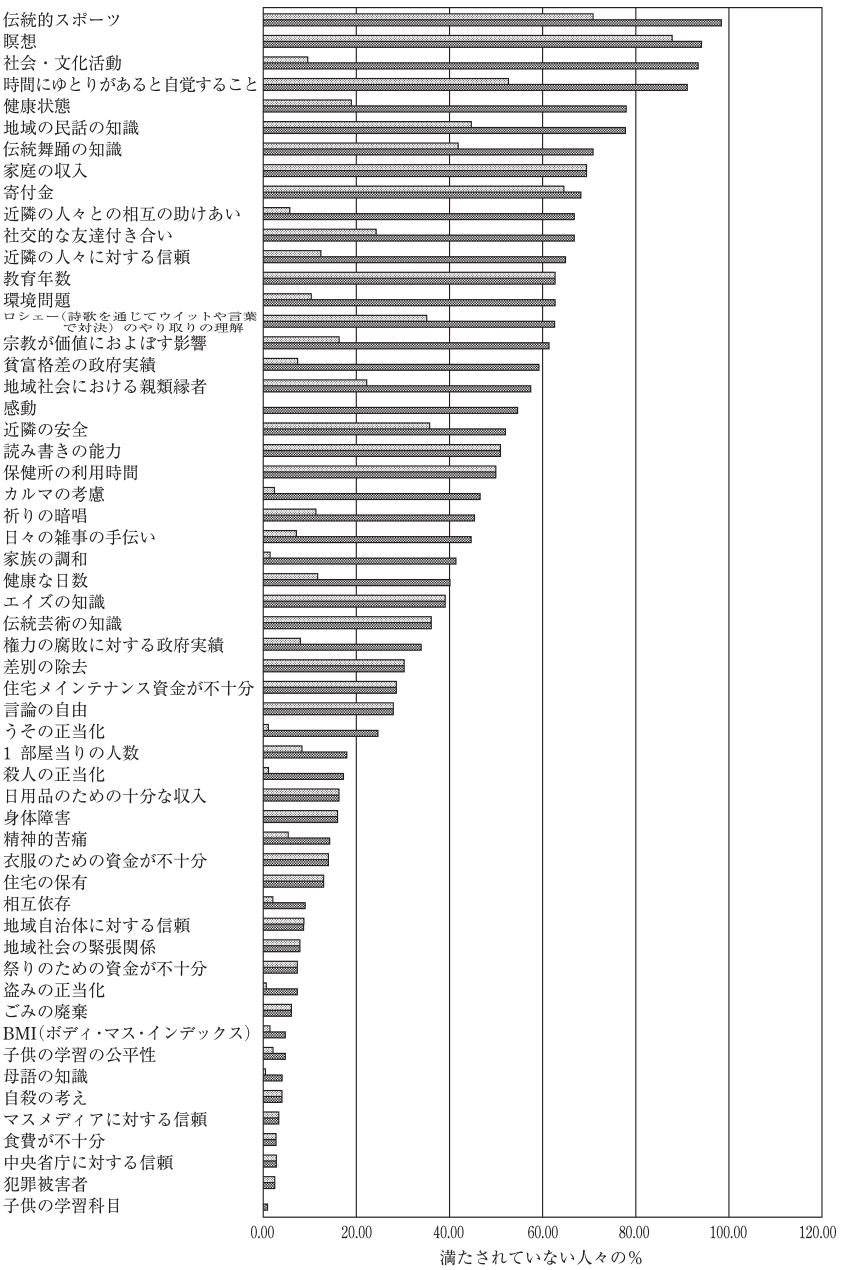
五七の質問項目の「充足カットオフ」「貧困カットオフ」値を測定して、一覧の図にしたものが図②である。

この図でみて、いかにもブータンならではと思えるのは、これ未満だと充足していないとする「充足カットオフ」の高い値を示しているのは、〝伝統的スポーツ（ブータンでは弓〈ダツェ〉）〟が最も充足していないとする率が高い。次いで〝瞑想〟、〝社会・文化活動〟、〝時間にゆとりがあると自覚すること〟、〝健康状態〟、〝地域の民話の知識〟、〝伝統舞踊の知識〟――の順に充足していない率は減少していく。

瞑想や地域の民話の知識、伝統舞踊の知識など、いかにもブータンのカルチャーを想起させ、こういう調査の意義を感じさせる。

しかし、これだけのデータでは、具体的政策の提起にまでは弱い。

図②　各指標について「充足カットオフ未満」（下段）、「貧困カットオフ未満」（上段）の％



出典：Sabina Alkine et al. 2008, Gross National Happiness and Poverty in Bhutan: Applying the GNH Index Methodology to explore Poverty, p. 12

その点、第二回調査は、ＧＮＨの九つの要素のうち、「環境」をのぞく八項目について、さらに詳細なデータ（図表）が示され、ブータン総研の研究者達が分担して解明しており、具体的政策に落し込める可能性は、はるかに高い。

九項目（実際は八項目）についての八論文の分析を紹介していくと、次のようになる。

1　「地域の活力」[12]

まず「地域の活力」では、ボランティア率（五一・九％）は『寄付白書二〇一〇』（日本経団連出版、二〇一一）にみる日本のボランティア率三六・一％、米国のボランティア率二六・八％をはるかに上回るが英国六六・〇二％には及んでいない。このようにブータンのボランティア率は英国よりやや低いものの、日本、米国より高い。

ブータン人が大切にしているボランティア活動は、どういう面で発揮されるのか――。まず、〝家族の一員がなくなった時〟、〝宗教的行事、毎年のチョクのとき〟（チョクとは毎年一一月末から一月初めに、家族全員が集まり、家族の守護神に一年間の平穏に感謝し、翌年の無事を祈る行事）（少ない人数でも三〇人近くの家族が集まるので、近隣の人達のボランティアの助けが必要となる）、田植えや収穫、宗教的建造物の建設、住宅の修理などで、日本のような先進国ではサービス産業が発達しているので、葬式であれば、葬儀屋さんに任せられるが、ブータンでは、近隣で助けあって、おとむらいをするのである。

次に「寄付」率は八八・七％と九割近い人が実践しており、前出の『寄付白書』にみる、日本、米国、英国の寄付率は、三四・〇％、六五・五％、五四・〇％で、いずれの国もブータンには及ばない。

ちなみに、東日本大震災では、第五代国王は、早速多額の義援金を寄せられたほか、ブータン在住の日本人を集めて、寺院で法要をいとなみ、バターランプに火を灯された。ちなみに〝バターランプに火を灯す〟というのは、ブータンでは幸先の良いことを祈る、最高のパフォーマンスなのである。

ＧＮＨ調査のすぐれている点は、ボランティア率、寄付率を算出するだけでなく、ボランティアや寄付をする人の〝幸福感〟を調査している点だ。表①はボランティアする人としない人の幸福度を出ているがボランティアする人の方が幸福度が高いと出ており表②は、寄付する人の方が幸福度が高い――と出ている。

ここで重要なポイントは、ブータンの人が、ボランティア、寄付をする率が高いのは、チベット仏教カーギュ派の教え、「互

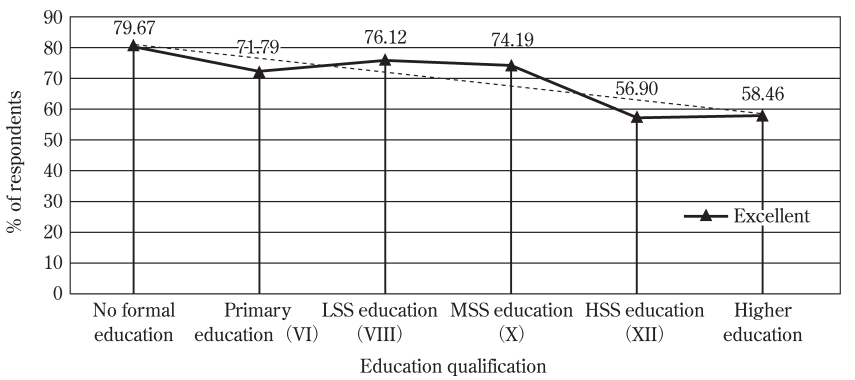
表①　Voluntary help and happiness

Did you provide voluntary help?	Mean happiness level	N	S.D
Yes	6. 23	493	1. 951
No	6. 05	456	2. 053
Total	6. 15	949	2. 001

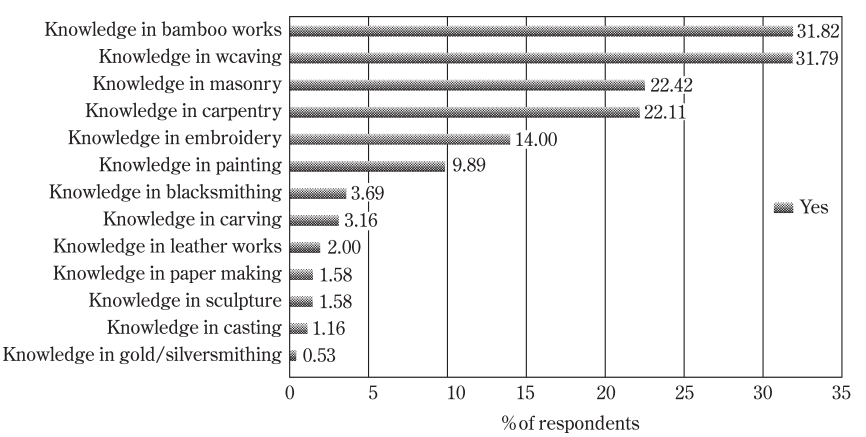
表②　Donation and happiness

Did you provide donation?	Mean happiness level	N	S.D
Yes	6. 17	843	1. 981
No	5. 95	107	2. 152
Total	6. 15	950	2. 001

図③　Excellent ecological knowledge by education qualification



図④　Proportion of people reporting knowledge in different arts and crafts



助・互恵精神」が深く浸透しているためであり、また、互助・互恵は、個人間のやりとりで、市場を経由しないので、GDPには一切カウントされない。従って、ブータンはGDPは小さいかもしれないが、ボランティアや寄付を受ける人だけでなく、それを提供する側もハッピーになれるということが示され、ブータンが名実ともに幸福立国として、国際的にきわ立っているといえる。

2 「教育[13]」

従来、教育は、進学率などで語られることが多かったが、ここでは、歴史・文化、市民性、エコロジー、動植物の固有種の知識といった非公式のルート（人づてにとか、村の長老などを通じて）で得られた知識を重視している。

まず〝ひいおじいさん、ひいおばあさんの名前を知っているか〟の結果が年齢階級別一欄表で出ており、当然のことながら、六〇歳以上では知っている率が最も多く、五一・六一％。最も若い一三歳～一七歳では二〇・三四％と少なくなっている。

次に、学歴別に環境知識のある率を出した図③では、何と、学歴が高くなるほど、環境知識の度合が低くなっている。

この環境知識とは、地球温暖化の問題とかCO2削減の問題をいうのではなく〝植物の名前〟、〝動物の名前〟を知っているか や、〝地域の人々が、毎年ある一定の時期、ある一定の山に入ることを制限する〟（これは法律があるわけではないが、あられや嵐や豪雨による災害から人々を守るためのルールである）の知識、魚釣りや狩猟の制限の知識について知っているかや木を植えるときの知識があるかなどを意味している。

高学歴者ほど、地域社会での長老などからのいい伝えを知る機会が少なく、我々先進国の人間も、ガツンと、頭をたたかれた感がある。この環境知識は、地方で高く、地方在住の八〇・六六％が知っているが、都市部では四六・五四％に止まっている。

またブータンの教育の伝承としては、すばらしい手工芸の技術があり図④のように、竹細工、織物、石工術、木工、大工、刺繍、絵画などの芸術作品が、日常的に生活の中にとけこみ楽しまれている。ブータンから発信される情報（例えばブータン総研の印刷物など）には、必ずカラフルな背景やデザインが付加されて、ブータン文化をたんのうできる。

3 「時間の使い方とバランス[14]」

時間は経済的、社会的幸福に重要な資源であるが、調査結果では、女性の労働時間が男性より長く、とくに主婦では、家事労働時間が、三・三三時間と労働時間の中で最も多くを占め、女性の

表③　Cross tab between work hour and mean happiness

Sex	Mean happiness	Mean work hours
Male	6.3	6 : 54
Female	6.0	8 : 12

表④　Spirituality

Sl no.	Spirituality	Frequency	Percentage
1	Do you recite prayers:		
	Daily	363	38.41
	Occasionally	459	48.57
	Not at all	123	13.02
	Total	945	100
2	Do you practice meditation:		
	Daily	13	1.37
	Occasionally	78	8.23
	Not at all	857	90.4
	Total	948	100
3	Do you visit local temples and places of spiritual significance:		
	Daily	28	2.95
	Occasionally	887	93.57
	Not at all	33	3.48
	Total	948	100
4	Do you discuss spiritual issues with your children:		
	Daily	84	12.21
	Occasionally	327	47.53
	Not at all	277	40.26
	Total	688	100
5	Do you consider Karma in the course of your daily life:		
	Always	428	45.01
	Sometimes	494	52.05
	Never	28	2.94
	Total	950	100

表⑤　Frequency of prayer recitation by Mean happiness level

Sl no.	Frequency of prayer recitation	Mean happiness level
1	Daily	6.16
2	Occasionally	6.15
3	Not at all	6.12

幸福度は男性より低くなっている（表③）という問題がある。このブータンのジェンダー問題は、本論の中でとり上げる。

4 「精神面の幸福」[15]

ブータン人とスピリチュアリティは、切っても切り離せない。表④―1は、お祈りを毎日、時々、するかどうか。表④―2は、瞑想を毎日するかどうか。表④―3は、お寺やお祈りの場を訪れているかどうか。表④―4は子供と精神的なことがらについて話し合っているかどうか。表④―5は、毎日の生活の中でカルマ（業）について考えるか。といったスピリチュアリティへの反応であるが、表⑤は、お祈りを〝毎日〟、〝時々〟、〝全くしない〟人の幸福度。もちろん毎日する人の幸福度が最も高い。おそらく、こういう質問の入った意識調査はブータン独自のものであろう。

5 「良き統治」[16]

「我々の責務は、第一に何をおいても、国の平和と平穏を実現する統治であり、GNHのビジョンの完遂であり、新しい統治システムとしての民主主義の強化である」とジグメ・ケサル・ナグメル・ワンチュク第五代現国王は王位継承の日の二〇〇六年一二月一七日に宣言している。『最大多数の最大幸福』の喧伝者、ジェレミ・ベンサム（一七四八～一八三二）は「最大多数の最大幸福の実現は、政府の責任であり、その実現には代表制民主主義しかありえない」と、一八二二年に述べているが、第四代国王が二〇〇八年から王制を廃止して、立憲議会制民主主義体制にすることを置き土産にされたのには、このベンサムの知に従われたのかと、思いたくなるほど、あざやかである。

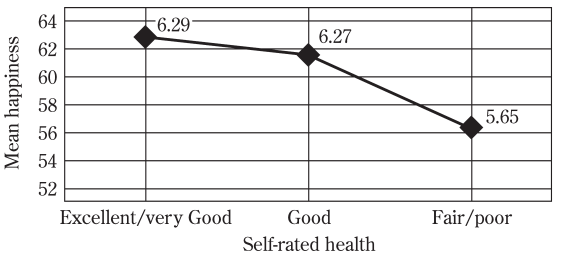
6 「人々の健康」[17]

健康と幸福の増進は、多くの国の政策の究極的目標である。ブータン人の文脈では、幸福とは身体が健康で、精神的に悩み事がないことであるといえる。WHO（世界保健機関）の健康の定義でも、完全に身体的、精神的また社会的に健康であることであり、単に病気にかかっていないという意味だけではないとしている。

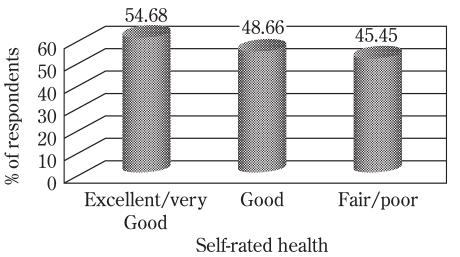
図⑤は、健康状態がよい人ほど、幸福感が高い――と出ており、図⑥は、健康状態の良い人ほどボランティア活動に貢献していることを示している。

ブータン社会は、健康で、幸福を実感している人ほど、ボランティアに熱心で、お互いに助けあいができて、助けられる人も助

図⑤　Mean happiness by self-rated health



図⑥　Volunteer labour contribution by health status



ける人もハッピーという好循環社会になっている。

7　「文化の多様性」[18]

ブータンの毎日の生活の伝統を守ることを〝非常に重要〟と考える率が八六・三%、〝重要〟が一二・六%で計九八・九%、ほぼ一〇〇%近くが、ブータンの伝統を守ることを重要としており（表⑥）、一九八九年一月六日に第四代国王が「ブータン固有の文化を守る布告」を出しているが、それが国民によく定着しているといえる。

又、ブータン人の間で、家庭、地域社会、学校、職場で互いに助けあい、絆を大切にし、それによって法律をつくるよりも、社会のセーフティネットになっているといわれる「ディグラム・ナムザ」(Driglam Namzha) 精神がある。ディグラム・ナムザを重要とする意見は九三・七%に達している。

ブータン人に〝あなたが幸せを感じるのは、どんな時ですか〟と聞くと殆んど〝家族と一緒にいるとき〟――という答えがかえってくる。表⑦は、人生の目的で非常に大事なことは何かを聞いているが、〝非常に重要〟では、トップが「家族生活」（九五・一%）で、次が「責任」（九一・八%）「キャリアの成功」（九〇・三%）「精神的誠実さ」（八七・七%）などとなっている。ブータ

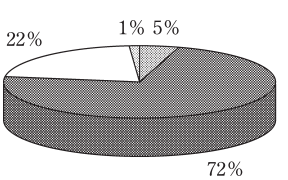
表⑥　Importance of maintaining Bhutanese traditions by age group

Age category		How important is it to you to maintain Bhutanese traditions within your everyday life?			Total
		Not important	Important	Very important	
0-17	Count	2	12	44	58
	% within age category	3.4%	20.7%	75.9%	100.0%
18-30	Count	4	55	325	384
	% within age category	1.0%	14.3%	84.6%	100.0%
31-45	Count	3	28	235	266
	% within age category	1.1%	10.5%	88.3%	100.0%
46-60	Count	1	18	153	172
	% within age category	6 %	10.5%	89.0%	100.0%
Above 60	Count	0	6	57	63
	% within age category	0 %	9.5%	90.5%	100.0%
Total	Count	10	119	814	943
	% within age category	1.1%	12.6%	86.3%	100.0%

表⑦　Importance of life goals as % of respondents

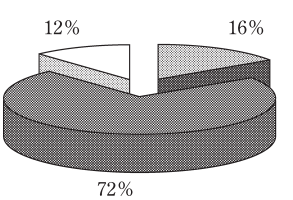
	Not important	Somewhat important	Very important	N
Family life	0.1	4.8	95.1	950
Responsibility	0.3	7.9	91.8	949
Career success	0.3	9.4	90.3	949
Spiritual faith	0.3	12.0	87.7	950
Financial security	0.3	12.1	87.5	947
Compassion	0.4	16.8	82.8	948
Friendship	0.1	18.8	81.1	950
Generosity	0.4	20.2	79.3	949
Material wealth	0.6	20.1	79.2	949
Reciprocity	2.1	22.5	75.4	948
Freedom	1.6	27.7	70.7	948
Pleasure	2.3	33.6	64.0	948

図⑦　Distribution of respondents by perceptions on their income



Wealthier than athers　About the same as others
Poorer than others　Don't know

図⑧　Distribution of respondents by financial security



Not enough　Just enough
More than enough

ン人のまじめさ、そして「家族を大事」とする考え方は、ブータンで名実共に生きており、ブータンの強みとなっているといえる。

ブータンは、新しいメディアや、コミュニケーションの手段に対しても、きちんと体制を整え、少しずつ、着実に導入しており、一九九九年にテレビとインターネットが解禁になり、携帯電話は、二〇〇三年に解禁になった。二〇〇八年一一月時点での、首都ティンプーでの携帯電話の普及率は、六〇％と聞いた。

8　「生活水準・所得」[19]

ブータン人は、富の平等を重視し、図⑦のように、所得について、他人より豊かとする率は、五％で、他人と同じが圧倒的に多くて、七二％にのぼっている。

また図⑧のように、経済的安定については、十分でないは一六％で、丁度十分が七二％。十分以上が一二％にのぼっている。

簡素な生活をし、困っている人を助け、ほどほどに満ち足りていれば良い――との考え方だ。〝欲を出さなければ幸せ〟というのもブータン流かもしれない。

八　第二回ＧＮＨ調査に見るブータン社会の問題点

以上のＧＮＨの第二回調査（ブータン総研は第一回としている）のデータの中で二点重要な問題点がある。

第一は、ジェンダー問題で、表③にみるように、女性の労働時間は家事時間を入れると男性より一時間一八分長く働いており、幸福感は男性は六・三であるが、女性の幸福感は六・〇と低い。

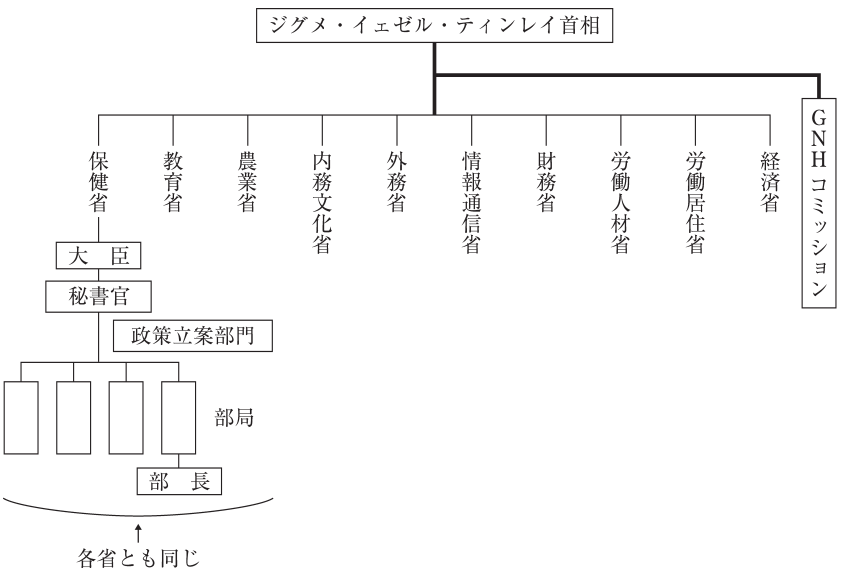
また日本では考えられないが、女性に対する迷信（女性はけがれている）を信じる率は、女性は七六・六％（男性七一・九％）と男性より高く、信じこまされているといえる。女性の方が自殺願望も高く出ている。

実は、第一回調査をまとめた、前出のサビーナ・アルカイア博士は、そのまとめの中で、「女性の貧困は、人数において、またすべての多次元の貧困尺度においても、男性より高い。例えば、少なくとも三つの欠乏で苦労している人々の七三％は女性であり、男性は二七％である。女性の貧困の相対的上昇は、たとえ欠乏の数が男性と女性で同じであったとしても、女性の貧困は男性より重大である」と、論じている。

アルカイア博士は貧困の研究者として、貧困にスポットを当てているが、前述のように多様なジェンダー問題がある。

図⑨　GNHの実践体制

☆ティンレイ首相がGHNの実行部隊長
〈10省を束ねる「GHNコミッション」〉



筆者大橋は、二〇〇九年九月二日、東京の日本外国人特派員協会で、ブータンのジグメ・イエゼル・ティンレイ首相が基調講演をされた時、質問の時間に「ブータンのGNHは、九つの指標で構成されているが、ジェンダーを入れて一〇にされてはどうか」と申し上げたが、「ブータンでは男女は平等であり、その必要はない――」との答えであった。

このギャップは非常に大きく、ジクメ・Y・ティンレイ首相には、第二回調査のデータをつぶさに目を通されて、対策を打たれることを望みたい。

第二は、ブータンが発展（都市化、経済の発展、高学歴化、若者人口の拡大）の中で明らかに失われていくと思われる面が、見られることである。

「コミュニティ所属意識」は、地方（Rural）で高く、都市（Urban）では低くなっている。

このような、都市化、経済発展は、ブータンで進んでいくことは抑止できないと思われる。その点図⑨のGNHの実践体制をみても実行部隊長のティンレイ首相の英断が待たれるところとなる。

しかし、以上みてきたように、ブータンは

①ブータンの毎日の生活の伝統を考えることが重要　九八・九

％

②ディグラム・ナムザは重要　九三・七％

③人生の目標で大切なもの――「家庭生活」　九五・一％。

こういうブータン社会の骨組みのような部分が、しっかりしているところから、国の形がきちんと組織されていないラダックと比べて文化が総崩れになることは考えにくい。

九　ラダックとブータン、一致点と相異点

ブータンとラダックは、同じチベット仏教カーギュ派の教えを信奉している点で、文化的に共通するところが少なくない。ヘレナ・ノーバーグ・ホッジ著『ラダック 懐かしい未来』（山と渓谷社、二〇〇三）〈参考資料：ヘレナ・ノーバーグ＝ホッジ、辻信一、二〇〇九、『いよいよローカルの時代～ヘレナさんの「幸せの経済学」』大月書店〉と、筆者の『幸福立国ブータン』（白水社、二〇一〇）とを比べながらまず両国の共通点と相異点（ラダックの説明の頁数は、ヘレナ著『ラダック 懐かしい未来』より）を整理する。

「ラダック」

元は王国（一八四六年ジャンムー・カシミール藩主の統治下に）。

一九四七年インド・パキスタン戦争後、インドのジャンムー・カシミール州東部の地方の呼称となっている。

中心都市　レー（旧首都）

面積　八六・九〇四㎢

人口　二七〇・一二六人（二〇〇一年）

使用言語　チベット語、ウルドゥー語

〈宗教〉チベット仏教カーギュ派（一部にイスラム教も）

（ブータンと共通語も少なくない）。

マニ石（祈りを刻んだ石）、p. 99

マニ車（祈りを刻んだ円筒状の車）、p. 103

旗竿（タルチョ）、p. 104

グル・リンポチェ、p. 104（インドからチベット仏教を伝えた）

（パドマ・サンヴァバ、p. 111注⑨）

こんにちは（タシ・デレ（ク））

（ラダックの記述の頁や、注の表記などは、『ラダック 懐かしい未来』より）

「ブータン」

独立国。二〇〇八年より王政を廃止して、立憲議会制民主主義国に。

国連に加盟（一九七一年）

首都　ティンプー

面積　九州の〇・九倍（四六・五〇〇㎢）

人口　七〇万人

使用言語　英語が第一公用語、ゾンカ語

〈国教〉チベット仏教カーギュ派

マニ車（祈りを書いた回転する筒）

ダルシン（経文旗、お祈りの旗）（チベットの僧、シャブドウン・ンガワン・ナムゲル p. 42が一六一六年にブータンに来て、ブータンを一つの国に統一。p. 43）

グル・パドマ・サンバヴァ（p. 57）（パドマ・サンバヴァの生まれ変わりが、シャブドウン・ンガワン・ナムゲル）

こんにちは「タシ・デレ（ク）（Tashi Delek）」

（ブータンの記述や頁数は『幸福立国ブータン』より）

ヒマラヤのシャングリラ（桃源郷）「ブータン」

第四代国王（在位一九七二～二〇〇六年）の即位まで、鎖国同然（ヒマラヤの桃源郷〈シャングリラ〉）のブータン。

第四代国王即位後、国連（一九七二）、ＩＭＦ（一九八一）、ＷＨＯ、ＵＮＥＳＣＯ、アジア開発銀行（一九八二）、ＵＮＤＰ（一九八三）、南アジア地域協力連合（一九八五）などに、つぎつぎと加盟し、ブータンはさながら小さな国際国家となった。ＧＮＨという誰も反対できないスローガンをかかげたヒマラヤの小国に国際社会は援助を惜しまず、現在国際援助は、ブータン財政の三〇％を占め、ブータンでは、教育と医療は無料となっている。

日本は一九六四年の東京オリンピックと、新幹線開通で、援助される側から、援助する側になろうと同年よりＪＩＣＡからブータンへ、農業指導、道路、橋、学校の建設に援助を続けている。一九六四年の最初に派遣された西岡京治氏は、ブータンの農業指導で、リンゴやジャガイモを輸出作物に育てるなどの実績をあげ、第四代国王から、民間人最高位の「ダショー」の称号を贈られ、西岡氏はブータンに骨をうずめられたことで有名。

以上のように、ブータンは、一〇〇年強続く、ワンチュク王家の「良き統治」によって、ジグメ・イエゼル・ティンレイ首相が、国連でも演説し、ＧＮＨをＰＲし、幸福を国連の議会の議題にするようにすべしと提案するなど国際的存在感を増している。

開発とグローバル化に翻弄されるラダック（頁数は『ラダック懐しい未来』より）

一方ラダックは、九五〇年～一八三四年までは独立した王国であったが、一九四七年のインド・パキスタン戦争後、ラダックはインドのジャンムー・カシミール州の一部になり、一九七五年～八〇年以降、西欧的近代化、グローバル化、開発経済が急速に進む。

カシミール政府、デリーのインド中央政府のグローバル化（p. 121）によって、一人の観光客が一日に使う金額は、ラダックの一家が一年間に使う金額に等しい（p. 125）とされるようになる。異邦人をみて、ラダックの人達は、貧しさを感じる（p. 125）。

西洋人の目には、ラダックの人々が貧しく写る。ラダックの人びとの心理的、社会的、精神的豊かさを見ることができない（p. 126）。

一方、ラダックの人々は、西洋人の生活の一部ともいうべき、ストレス、退屈、苛立ちを、経験したことがなかった（p. 127）。

開発は観光だけに止まらない、西洋の映画、インド映画、テレビ、金持、美人、勇者が魅力にあふれた人生を送っている（p. 127）。

突然押し寄せてきた西洋文化に、ラダックの若者たちは劣等感をもつ。若者は、サングラスや「ウォークマン」、ジーンズなどの現代のシンボルを追い求め、映画の中でカッコよく映し出される暴力シーンにふれる。ラダックの人達が変っていく。怒りっぽく不安定になる（p. 128）。

ラダックの少年ダワがラダックで最初の旅行代理店を開き、トレッキングや僧院巡りでかせいでいる（p. 129）。

〝村は遅れている。まだ電気もない（ダワ）〟（p. 130）。「この世はお金で回る」（p. 132）。

もともと人びとは使える資源の限界、個人の責任をわきまえていた。新しい経済は人びとを土地から切り離してしまった。自分の命を支える水や大地は見えない（p. 133）。

二　ラダックを襲う金銭経済

何世紀もの間、人びとは対等の友人としてお互いに助けあいながら働いてきたが、今では収穫期になると賃金労働者を雇うようになった。お金を払う方はできるだけ低く抑えたがり、雇われる側は、できるだけ高い賃金を望む。人間関係が変わってきている。お金が人のあいだにくさびを打ち込み、さらに溝を押し広げ

る。

経済変化のために農民でありつづけることが困難になった。共同作業でやっていた頃はお金は必要なかった。農作業の労賃が上昇し続けて支払いができなくなり、仕方なく、村を棄てて街で賃金稼ぎをしている農民もいる。

開発が進むにつれ、市場経済に依存するようになる（p. 134）。

新しい経済は貧富の差を拡大。子供に教育、英語教育を受けさせたい（p. 135）。

西洋流の技術開発の「副作用」として、レーにできたディーゼルエンジンの製粉工場は、昔からある水車より何倍ものスピードで製粉。村人は村から遠く離れた製粉工場まで運ばねばならない。製粉工場は、有害な煙を大気中に出す（p. 137）。

昔は家畜は友達であったが、今は機械が中心になり、人間も機械的になり、死んだような関係となった。

〈伝統的経済〉――時間はあり余るほどあった。人間のペース

〈現代の経済〉――時間は高価なものとなり、人びとが「時間節約」の技術を手に入れ、生活のペースも速くなる（p. 138）。

近代世界の道具や機械が時間を節約する一方で、全体的にみると、新しい生活様式は、時間を奪い去ってしまう（p. 139）。

昔は最も尊敬される人は「僧侶」であったが、今は「エンジニア」（仏教の教えなんてとんでもない）（p. 140）。

西洋化、都市化は、自分の文化や自然から隔離し、狭い視野におちいらせる。かつては祖父母、家族、友だちから学んだ（p. 142）。（西洋式の教育は一九七〇年代から）こういう知識は現代の学校では学べない（p. 143）。

西欧中心のモデルを前提とした教育は、自然環境や文化からかけ離れた一般的知識の教育（p. 144）。

教育は、人々を農業から遠ざけ、貨幣経済に頼らざるをえない都市へ引き込んでいく。この近代教育は、ラダックの人びと同士を分断し、土地から切り離し、地球規模の経済システムの最下層に位置づけてしまった（p. 146）。

抗しがたい近代化の圧力が、個人を都市へ引き込む（p. 150）。

地域の相互依存の関係が崩壊。家族、共同体の関係が崩壊。「お互いさま」「相互扶助」が消える（p. 157）。

文化の一極集中化で、ラジオで、最高の歌手、最高の語り手が聞ける」、自分で歌を歌ったり、自分の物語を聞かせる必要がなくなった（p. 158）。

二　ラダックの実態から学ぶ〝幸福〟のあり方

西洋人は非西洋文化を劣るものだと決めつけてきたが「社会」的には、人びとの幸福、「環境」面では持続可能な運用をラダック文化から学ぶことができる（p. 173）。

ラダックの人たちは、何世紀もの間、大切にしてきた社会的、環境的なバランスを犠牲にすることなく、生活を豊かにできる（p. 176）。

三　ラダックとブータンの共通性

ラダックや近隣のヒマラヤの国ブータンの状況は、人間の幸福を金銭だけで測ることの欠陥を示している。両国とも第三世界の多くの国と比べても生活水準は高く、人々は、生活に基本的なものを賄い、その上、芸術や美しい音楽をたしなみ、友人、家族と過す時間や、余暇に費やす時間は西洋人よりも多い。

だが世界銀行は、ブータンが世界の最貧国のひとつであるとしている。GNPは小さいが、NYのホームレスも、ブータンやラダックの人々も、ともに所得はゼロだが、その背後にある現実には雲泥の差がある（p. 181）。

以上のように、ヘレナ・ノーバーグ・ホッジは結んでいる。

ラダックが、王国が崩壊したあと、インドのカシミール地方の一部となった状態で、インドから押し寄せたグローバル化、近代化の波に洗われていくさまを、一九七五年から数年間直視した貴重な研究である。

本論前半の、ブータンが、都市化、経済発展、若者人口の増大の中で、伝統的な文化が、ゆらいでいることを、GNHの第二回調査のデータを示しながら述べたが、ブータンは王制を廃止して立憲議会制民主主義国となってはいるものの、国としての伝統文化を守ることや、社会のセーフティネットになっているディグラム・ナムザ精神が、健在で、ブータン人が最も大切にしている「家族」の重視もゆらいでいない。

GNHというスローガンを国是としているブータンは、王国が存在していない、ラダックと比べて、同じチベット仏教カーギュ派の文化（互助・互恵のやりとりで成り立つ社会）を共有しつつも国王による「よき統治」が基礎にあるため、ラダックのように簡単にグローバル化、近代化に流されることはないといえる。

注

（1）Clifford Cobb, Ted Halstead and Jonathan Rowe, 1995, if the

GDP is up, why is America down, The Atlantic monthly, Oct. 1995, Academic Research Library. pp. 62–63, 67–70.
(2) Nordhaus, W. and Tobin. J. 1972 “Is Growth Obsolete?” Economic Growth, Notional Bureau of Econimic Research.
(3) 経済審議会ＮＮＷ開発委員会編、一九七二、『新しい福祉指標ＮＮＷ』大蔵省印刷局
(4) Summery notes from the Beyond GDP conference. Highlights from the presentation and the discussion 2007.
(5) 小野伸一、二〇一〇「幸福度の測定をめぐる国際的な動向について」立法と調査、参議院企画調整室、p. 181
(6) 日本経済新聞、二〇一一年一二月二六日
(7) 「日経グローカル」No. 182, 2011. 10. 17, pp. 10–45
(8) Deutsche Post Present the first German happiness stady, Sep 20. 2011.
(9) 山本けいり、二〇〇一、『ブータン～雷龍王国への扉』明石書店、p. 29
(10) His Excellency Lyonpo Tigmi Y. Thinley, 1998, Values and Development, “Gross National Happiness”, Text of the Keynote Speech Delivered at the Millenium Meeting for Asia and the Pacific, 30 October～1 November 1998, Seoul, Republic of Korea.
(11) Sabina Alkire et al. 2008, Gross National Happiness and Poverty in Bhutan; Applying the GNH Index Methodology to explore Poverty. http:www.ophi.org.uk/subindex.php/?id=publications
(12) Sangay Chophel, Community Vitality
(13) Karma Wangdi, Education indications
(14) Karma Galay, Time Use and Happiness
(15) 著者不明、Psychological Wellbeing
(16) Puntsho Rapten, Good Governance and Gross National Happiness
(17) Karma Wangdi, Health indication
(18) Sangay Chophel, Cultural Diversity and Resilience
(19) Karma Galay, Standard of living and Happiness

＊（12）―（19）は www.grossnational happiness.com より